

幼児の爲に歌を作りて (4)

葛原しげる

幼児の爲の歌は、歌よりも曲の方が大事だとも

なり、苦心を要します。

いへると、大正三年夏、倉橋教授から聞いて、早

あられ

梁田貞氏曲

速、試みたのが、「ピアノ」であり「お人形」「ほたる」などであり、「林檎」であり、「落葉」「雪」そ

コン／＼コン／＼ 霰が降る

の他少くないのです。そして、次の「あられ」も

バラリ バラリ

さうです。即ち、曲を先に作つて、後から、その

コン／＼／＼／＼

曲に合わせて作歌するのですから、歌は、非常に曲

お屋根に 霰が降る

の制限を受けます。詞が自由に使へません。字脚

バラリ バラリ バラリ

は勿論、アクセントまでも限られますから、澤山

お手々を ひろげて 霰を受けよ

ある日本語の中から、その場所のアクセントに合

コン／＼／＼／＼ 霰がふる

ふものをえらんで、而も前後の連絡をつけて、全

バラリ バラリ バラリ

體として、よい詩にしようといふのですから、か

(大正幼年唱歌第八集)

「お屋根に霰がふる」と「お手々ひろげて」と
は同じ曲ではありませんが、アクセントは似てゐ
まして——しかも日本語本来のアクセントでない
ものになつてしまひました。即ち、「おやね」のね
があまり強くなつて、

「おや 根に！」

と聞えるのです。「おや」は感歎詞に聞えるのです
しかし、霰が降るので、オヤ、根に降つ
てゐる」のでもありませんからとて我慢する事に
したのでした。板廂などに降つて来る霰でなくて
も、バラリとコン／＼との二つの感じが、霰に相
違ありませんから此の二つの擬聲を多く入れまし
た。そして元來曲が、如何にも描寫的で、よく此
の氣持をあらはしてゐましたから——のち私は、
『コンコロ踊』といふのも作りまして、これには、
「コンコン、コロコロ、コンコロコン」といふ様
に、思ひ切つて、擬聲を入れましたほど、私には

霰は、降つて来るや、踊りまはる様に思はれて仕
方がないのです。また

お手々をひろげて霰を受けよ

とは申しましたが、お手々を擴げた位で、霰は受
けられるものではありません、私共は幼兒、今の
エプロンの代りに前掛をさせられてをりましたか
ら、すぐ、前掛をひろげては受けました。しかし
今は、エプロンをひろげるとも申されませんので、
「お手々」にしました。降つてゐる霰は、如何に
も多く見えますが、實際は、一寸平方に一粒なん
て落ちてはゐないのです。横から見ると、重なり
合つて見えるためか、ずゑ分、密に降つてゐる様
に見えるのですから、お手々の上になつて、幾粒
も入りさうなのです。これは幼兒の直感です。そ
れを考へていたゞかないと、あまりに低能兒の歌
になりさうですから、特に、附記いたします。

畳み紙

小松耕輔氏曲

一、四角な紙を いろ／＼に

畳んで行けば 面白い

帆のある船や 無い船や

胃や 鶴や お三寶

狐の面も 出来ました

二、四角な紙も 氣をつけて

畳んで行けば 面白い

まるまるまるに まんまるい

大きな林檎も 出来ました

あいしさうでも 食べられぬ

(大正幼年唱歌第八集)

此の作業をば、もと「折紙」と心得てをりましたところ、その道の方にさゝましたら、「をり紙」は

「織り紙」に聞えるので「畳み紙」といふのだと教へて下さいました。しかし、何うも「折り紙」といふ方もあり、大小様々の四角の色紙に「折り紙」とかいて賣つてゐるかとも思ふのですが、ほんとは「畳み紙」なのでせうかねえ、少しく心もとない事です。

さて、第一節は、一枚の紙、同じ大きさの四角な紙が、少しづつ違つた畳み方で、全然別の物になる事をいひ、第二節では四角な紙が、圓い林檎になる不思議をつかみました。あまりに、材料が稀薄ですけれども、その不思議は、力強いものですから、その爲に、一節凡てを興へるだけの値もありませうとて。

さて、その第一節の末行と第二節の第四行とを少し變へて、次の様にしては如何でせうか。

一。四角な紙を いろ／＼に

畳んで行けば 面白い

帆のある船や 無い船や

胃や鶴や あ三寶

狐の面も すぐ出来る

二、四角な紙も 氣をつけて

疊んで行けば 面白い

まるまるまるい まんまるい

大きな林檎も すぐ出来る

あいしさうでも食べられぬ

實は「すぐ出来る」のではなく、「よく楽に出来る」

とも謂ひたいのですけれど、曲もきまつてゐまして、字脚を變へる事は出来ませぬから、少し不徹底でも「すぐ」としました。でなければ、「よく」でせうか。

白熊

梁田貞氏曲

一、動物園に 熊がある

大きな白い熊がある

いつも二匹で檻の中

檻は 大きな鐵格子

格子の外では 多勢の

見物人が 立つてゐる

二、熊は一匹 池の中

ぐるぐ／＼廻つて泳いでる

兩手をさ／＼へた一匹は

ブラ／＼首を振つてゐる

格子の外では 多勢の

大人も小兒も不思議顔

(大正幼年唱歌第八集)

此のやうに表現の不熟がありました。が、今は、東京の動物園の白熊の所ならば、不熟でなく、此の通りで有り得る事になりました。しかし、多くの熊の檻には池はありません。池といふほどの水

はありません。池どころか、小さな／＼水溜りな
のです。それですから「池」の中でなく「水の中
なのです。そして、次の

ぐる／＼廻つて泳いでる

も少しく大きすぎるのですが、「水の中」といふ程
の小さい水溜りであつても、熊は、よく泳ぐので
した只如何にも、これは、池でない方が、一般向
だと考へられます。

○

幼児に理解される詞でなくては、幼児の歌に入
れて作つてはなりません。抑もその、幼児の言
葉といふのが、少しく、大人にとつては意外な場
合があります。幼児と共にあるものにとつても、
時々、此んな問題についての根本を覆へす事があ
ります。私自ら、毎年の夏を片瀬の海岸で暮した
のは大震災前の三年間でしたが、ある夕方、幼児
達に

「散歩に行かうよ」

と申しましたら

「どこへ」

と問ひますので

「さ、どこにしよう？」

「……………」

皆、だまつてゐますから

「濱邊へゆかうか」

と、私が申しましたら、大きい子供が

「え、」

と少し氣のない返事をしました。ところが、小さ

いのが

「はまべへゆきませう／＼」

と、非常な賛成なのです。

さて、街路小一町、路次を抜けて、砂山を越え
て、海岸へ出ましたところ、午前と午後と二度づ
／＼泳ぎに来る所ですから、珍らしくもなく、只私

の手につれられるまゝに、ついて歩いてゐるので、私は、海の風をよるこび、少しの波のうなりにも、繋いである小船の揺れることや、渚の砂の上に匍ひよる様に、また手を伸べて来る様に「波の子供」かとさへ興じてゐましても、幼児等は、そんな面倒くさい事は、氣にもとめないで、興なげの面持

すると、一番小さいのが

「早く行きませう、はまべへ」

といふのです。私は、笑つて

「はまべへ来てゐるぢやないか」

と申しますと、幼児は、何と答へたでせう、

「何だ。はまべつて、どこかと思つたら、かいが

んの事か」

幼児は、濱邊の事は、ちやんと、「海岸」といふ言葉で、百も知つてゐたのです。しかも、若き父は——つとめて、「幼児の了解」を氣にしてゐる心得

深き父は、海岸といふ漢語調を避けて、特に「はまべ」といふ日本語を使つたのでした。ところが意外にも、幼児達は、はまべといふ語をこそ知らなかつたのです。

そこで、「鐵橋」は「くろがねのはし」では分らず、「汽車」は「陸蒸氣」では分らないのです。

かくて、私は、次の歌詩の中に、大膽に、しかし、細心に、幼児の日常語ですから、「全滅」などといふ漢語調を入れました。幼児は「戦争ごっこ」をして、常に「開戦」と叫んでは陣地から飛出して突撃するのです。

一、大砲ガラガラ曳き出して

ドンドン打ち出す勇ましさ

大きな山も崩れるやうな

大きな音よ 勇ましや

二、砲臺ガラガラ崩れ出す

ドンドン逃げ出す敵の兵

逃げ出すやうな腰拔兵は

全滅させよ 狙ひ打て

(大正幼年唱歌第八集)

同じ言葉が、一つの曲の中に出る時は、せい
く、同じ曲譜にあてゝおきたいのです。さうで
ないと、歌詞を誤り、また、節をさへ誤り易くな
ります。

舌切雀

梁田貞氏曲

「全滅」もすこし氣にかゝりましたが、腰拔兵」

も少し亂暴でせうか。しかし、男兒の歌として、

よいと考へてをります。

次に偶然の成功は、「ガラガラ」と「ドンドン」

とが、二様の意味に、同じ曲譜につかへたことで
す。

大砲ガラガラ曳き出して

砲臺ガラガラ崩れ出す

ドンドン打ち出す勇ましき

ドンドン逃げ出す敵の兵

一、舌切雀のお土産の

軽い葛籠を爺さんが

お家へ歸つて開けたらば

ピカ／＼ギラ／＼金銀や

いろんな不思議な寶物や

きれいな着物や お道具が

お山のやうに はいつてた

これは 大した寶船

二、舌切雀のお土産の

重い葛籠を婆さんが

歸りの途中で開けたらば

ゾロ／＼ノコ／＼蟻螂や

蝮や毒虫 墓入道

三つ目の小僧や妖怪が

後から／＼匍ひ出した

これは たまらぬ助け船

(大正幼年唱歌第九集)

童話の中の善玉悪玉、はつきりとした對照の明快な面白み、それを歌にすれば、二節にしか作れませぬ。しかも筋の面白さの他に

ピカ／＼ギラ／＼

ゾロノコ／＼

の二つだけでも、前者は、ピカとギラとの交錯が、如何にも、プラス、マイナスの痛快さを味はせます。ピ」と「ギ」とのイ列の音の鋭さに對して、「カ」と「ラ」とのア列の廣やかさが、交互に

織り合つて、目まぐるしい感じを如何にも豊かに示します。それに反して、ゾロ／＼ノコ／＼は、全部がオ列の音ばかりです。その連續は、前者の目まぐるしさ比して、あくまで、鈍重に而も無氣味な連鎖です。また、

これは 大した寶船

これは たまらぬ助け船

の二つとも、「タ」の音の併用で、歌ひよくなつてゐます。

此の歌曲は、十數年前、作曲者自ら、度々獨唱されたものです。猿蟹合戦」と共に、當時、稀有のものでした。今でも、幼兒を悦ばすこと多大であるときいてをります。只、「歸りの途」中といふ言葉を何とかしたいと思つて氣にかけてゐます。